

ここでは、共同研究者の石窪氏が提起した文章を紹介していく。

### 『子どもたちをとりまく状況』

2017年5月、安倍首相は突然のように、「新たに憲法9条に自衛隊の存在を書き込む」そして「2020年に新憲法施行を目指す」といいました。安倍首相が臨時国会の所信表明演説でますます鮮明にその姿勢を示し、憲法9条の改定案を今国会に提出することを公言しました。国民が望んでもいない改憲論議を進めるのは傲慢そのもので、まったくの憲法の私物化です。

また、今年から小学校で「特別の教科 道徳」の授業が始まり、中学校の教科書も展示が終わり来年度から始まる教科書も採択されました。ここで注目しておきたいことは、ある教科書では、子どもの内心に関わる22の徳目の自己評価を強制しているということです。学習活動などについて自己評価させ、その理解度も5段階で自己評価を求めています。内容が決まっていて、考える授業ではなく押し付けそのものです。ほんの一部分の情勢ですが、基本的人権、民主主義、平和と命が、危機的状況の中で今次の合研をむかえています。

子どもたち一人ひとりには、個性豊かにのびのびと育つ権利を持っています。しかし子どもたちの現実はどうでしょう。今の社会の矛盾、大人社会の貧困格差の問題は、子どもたちの生活にも反映され、教育における格差に結び付いています。そして、自己責任を突きつけられるという競争と成果主義の中にいます。

子ども社会の人間関係も複雑で深刻化していて、心許して相談する相手もいなく、自分の居場所を見つけられないでいます。将来の夢を描くこともできず、無気力で投げやりになり、悶々としながら日々を過ごしているようにも思われます。いじめ問題も北海道では深刻です。

教育労働者の労働時間が今、注目されていますが、授業時間の増加、多忙化はなにも解決されていません。徹底した管理体制の下で、「子どもの声に耳を傾け、一人ひとりを大事にしたい・・・」という気持ちもくじけてしまいそうな状況におかれています。

こうした現実の中、子どもたちはさまざまな思いをいっぱい詰め込んで音楽室にやってきます。その思いを一つ一つていねいに受け止めなければなりません。私たちの分科会では、教師が子どもたちとの人間的な交わりを大切にし、共感し学び合い、喜びあふれる子どもたちの事実を出し合ってきました。今までの学びを大切にし、今年も充実した話し合いを進めていきたいと思えます。

### 音楽の授業と教材～私たち自身が豊かになる分科会に

昨年は4本のレポート報告がありました。わらべ歌や伝統音楽を中心とした授業、さまざまな困難を抱えている特別支援学級の子供たちとの音楽をとおしての実践、リーダーや集団作りを目指しながら全校で取り組む合唱活動の実践、一人ひとりの思いを大切にし、音楽に共感し自分としての表現を大切

にする授業の実践。そして、「子どもたちにとって音楽とは何か?」「なぜ学校で音楽を学ぶのか?」「どんな教材を選んだらいいのか?」という討論があり深められました。

音楽の授業を創るとき、教材を選び、そして深める仕事はきわめて大切なことです。そして、教師が周到に準備した教材を子どもたちがどう受け止めるか、その出会いは実にさまざまです。

音楽の授業は、選び抜かれた教材を媒介にして、子どもと教師が心を通い合わせながら、育ち合っていく場といえます。教材を選択する感性を豊かにし、選んだ教材を音楽として魅力的に表現できるよう精一杯努力して伝えること。教室でうまれた音楽に心寄せ、共有し、共に育ち合っていくという子どもたちへの信頼。など授業を創造するための大切な課題があります。

「上から教えるという目線ではなく、一人ひとりの想いや表現を大切に、子どもたちが一緒に音楽する楽しさに気づき、それぞれの音楽に心が動き、互いが高まろうとする教室から、たくさんのことを学ぶことができる」。こうした考えは、私たちが今までの教研での学び合いを積み上げてきた財産です。子どもたちの生き生きとした内面活動を大切に、引き出し、豊かな表現活動を保障し、歌う喜びを共有することを大切に、学び続けてきました。私たちの仕事に、これで十分ということはありません。今年も子どもたちの事実を出し合って、学んでいきましょう。』

## 二 実践報告～レポート発表

今回は小学校1本、中学校1本、合わせて2本のレポート提案があった。

- |       |              |  |
|-------|--------------|--|
| レポート1 | 思いを歌にのせて     | 山口 政世 (釧路市立鶴野小学校)                        |
| レポート2 | 追い込まれない音楽の世界 | ～子どもたちと共に育ち合う授業を～<br>石窪 満 (標茶町公立中学校音楽講師) |

今回は共同研究者、司会者以外の一般参加者がいない分科会となり、残念だったが、分科会運営委員が現役時代の音楽に関わる実践を語り、討論に参加し、「音楽の技術面を議論するのではなく、音楽で子どもを育てるといふ分科会だったんですね。」と共感を得ることができた。

レポートが少ない分、それぞれのレポートを深めることができ、「音楽の専門性とは何か?」「『そろえない』とはどういうことか」など、日頃はなかなか聞けない本質的な疑問を出し合える充実した分科会となった。

ここでは、それぞれのレポート提案の特徴的な内容を、提案者の原文を尊重し、引用も含めて報告したいと思う。

昨年の続きのレポート。特別支援学級の子どもたちと学期に1回、音楽の授業をしている。昨年度は週1回のペースで音楽の授業があり、その中で歌っていた歌を、今年もいくつか歌っている。

今回のレポートでは、今年度2回目の10月末の音楽の授業の様子をレポートと録音で報告した。

#### <はじめに>

鶴野小学校に赴任して2年目の今年は、特別支援学級フリーとしてのスタートだったが、諸般の事情により、運動会後の6月末から情緒学級「すずらん1」の担任となった。昨年度、私が担任していた学級だ。

「すずらん1」には1年生2人、2年生1人、3年生2人の5名の男子が在籍している。1年生は入学したばかりで頑張っていたが、2・3年生は「やりたくないことはやらなくていい」という雰囲気、特に2年生のM君は家庭の事情も重なって大荒れに荒れていた。

昨年度は特支全体で週1時間音楽の授業を持っていたが、今年度はそれぞれの学年の交流学习に行っているため、みんなで音楽をするのは、今年度はまだ2回だけ。その2回目は、先週（10月31日）だった。リズム表現は毎週1回、行っている。

#### <「ブルッキーのひつじ」その後>

昨年のこの時期に「ブルッキーのひつじ」を歌い始めた。絵本を見ながら歌っていくうちに、長い歌だがすっかり覚え、いつの間にかみんなのお気に入りの曲になっていった。

特に知的学級3年生のK君は、多動傾向もあり、漢字は1年生初期のものくらいしか読み書きできなかつたり、後先考えずに行動して学校内外でトラブルを多発させたりしてしまう子だが、この歌が大好きになっていつもリクエストしてくれた。

「メエ、メエ、メエ」しか歌えない子羊を叱るのではなく、子羊が楽しく歌える歌の本をプレゼントしてくれるブルッキー。大喜びで歌う子羊。最後にぴったり寄り添う二人。そんな絵本のストーリーと優しく2人を包み込むような音楽に、K君は自分の願いを重ねたのだろう。

実はM君もブルッキーを歌うのを楽しみにしていた。給食を食べながら、「今日は久しぶりにみんなで一緒に音楽だよ。」と話すと、「♪だーいすきだーいすき…」と歌い始めたのだ。しばらくすると、「あと、わかんない！ 忘れた！」と言うので、「ピアノを聞いたら、きっと思い出すよ。一緒に歌おうね。」と、私も期待に胸が膨らんだ。

しかし、残念なことに5時間目の音楽にMくんは参加できなかった。昼休み、みんなと思いきり遊んで帰ってきて、「さあ、音楽室へ移動！」という時に、機嫌を損ねてしまったらしい。はっきりした原因はわからない。たぶん、本人もわかっていない。

でも、半年以上も前に歌っていた歌が、まだM君の心に残っていたことがわかって、うれしかった。次の音楽の時には、きっと一緒に歌えるような気がする。Mくんも、やはり「みんなにわかってほしい」という願いを持っている子だと思う。

#### <なかよしの歌>

情緒学級ということもあり（基本的にみんな自分のことしか考えず、自分のペースで物事を進めようとする）、ずっと、子ども同士のつながりが薄いように感じていた。昨年は「言葉で気持ちを伝えよう」ことを重視してきたが、今年はそれに加えて「みんなでたくさん遊ぶ」ことを最重点にしている。

その甲斐あって、子ども同士の関わりや協力、協働する場面、話し合う場面が増えている。先日、道徳で「協力」をテーマに授業をしてみた。「協力」して一人では成し得ないことをやり遂げる場面のある絵本を読み、実際にすごいことができるのかやってみよう、という流れだ。「間違い探して力を合わせれば、先生よりも速く見つけられる、協力ってすごいなあ」、と実感してもらうのが狙いだった。

すんなりとはいかないところもあったが、なんとなく「力を合わせる」ってどういうことかわかったところで、「なかよしの歌」を歌ってみた。元気で明るい曲、「♪力を合わせりゃ、できないことはないさ」という歌詞に共感できるんじゃないかと思って選んだ。

言葉が速い曲なので、ひとまず、「エイ！」と「ワッハッハッハッハ、ハッ！」で楽しめればいい、と思って渡した。

これからも、助け合ったり、力を合わせたりすることを意識して毎日を過ごしながら、この歌を歌い続けて深めていきたいと思う。

録音を聴き、Kくんが「ブルッキーのひつじ」をしっかり自分のものとしてうたっていることが話題になった。また、絵本を読むように歌っていくことが、他の子どもたちと世界を共有することにつながっていくという指摘があった。

## 2 追い込まれない音楽の世界 ～子どもたちと共に育ち合う音楽を～

石窪 満（標茶町公立中学校音楽講師）

標茶町の全校生徒5人の中学生との実践レポート。子どもたち一人ひとりの「今」と、音楽へ向かう気持ちを見守りつつ、音楽で自分を表現することを追及しているレポート。

### はじめに～追い込まれない・・・？

2年生のSくんは、どうも他の授業では、宿題はしてこないようだし、忘れ物も多く面倒なことはやりたがらない、集中力がない・・・と思われているようだ。1年生の時は笑顔で音楽室にやってきて、「ボク、うたうの得意だよ！」という感じで、楽しく明るい表情でうたっていた。でも2年生になってから、時折、無表情な瞬間があり、その笑顔が消えていっている。歌はよくうたい、響いてくるのだが。

その音楽の時間にも“異変”が起きている。5人の中で唯一楽譜が読める（階名が読める）Sくんが、最近、音符の下に階名をふるようになった。リコーダーの指使いまでもがあいまいになってきたように感じる。また、いつも眠たそうな顔をしている。

Sくんのなかでは、各教科でやるが多すぎて、急かされている感じではないだろうか。しなければならぬことは分かっているけど、体が動かない。頭の中が混乱を起こしていて、大事なことも耳には入っていかない。今まで分かっていたことも混乱している。自分に自信をなくし、追い込まれているのではと思ってしまう。たしかに怠け癖のところもあるようだが、いつも苦境に立たされているような顔をしている。音楽は辛くないのかな・・・。

1年生のHくん、2年生のSくん、そして3年生のIくん、Kくん、Mくんの5人の声を紹介しながら話を進めていく。

職員室の会話や音楽の授業での様子の変化からSくんの苦しさに関心している。学校は、音楽の授業は、子どもたちにとってどんな場所になっているのか、どうあるべきなのか、一人ひとりについて丁寧に考察していく。

今の自分を表現している姿を見てほしい

（略）教師だったら、その子どもたちが、どれだけ努力をし音楽で自分を表現しているか、そこに気持ちを注いでほしいのだけど、“うまい人”に耳がいつまでも。

Sくんの作文からその緊張感が伝わってきます。

文化祭では、きんちょうしすぎて心ぞうがバクバクいって、はちきれそうでした。ぶじに終わってよかったな～と思いました。「狩人の合唱」や「ふなのりたちの歌」は、とっても楽しくうたえているんであんしんしてうたいました。

周りの大人たちは、子どもは音楽が好きでうたうもんだ、いとも簡単にうたっていると思っ  
ているようだが、実際はその内面はさまざまな葛藤がある。

文化祭で発表するという事は、一つの結果を披露するという事だから、いろいろな意味で  
勇気が必要だ。というのは見栄えとか聴き映えとかだけで評価されてしまうからだ。職員室の話  
でさえそうだから、家の人たちには何と言われるのだろうと考えてしまう。いや、家族はきっと  
その子の生い立ちを知っているから、いろいろな言葉を使って励ましてあげるだろう。問題は学  
校だ。たくさんの揺れを持っている子どもを理解してあげなければならない学校が、もっとも結  
果だけを求めている。緊張の中でも精一杯力を出して、今の自分を表現している姿を見てほしい。

学校ではとかく「できる」「できない」「上手」「下手」と評価の目で見がちだが、その時、その時の子  
どもの想いを受け止める、発表へ至るこれまでの姿を思い浮かべるなど、教師こそ子どもに寄り添う姿  
勢を常に持ち続けるべきだという考えが伝わってくる。

3年生のIくんは喉のコントロールがあまりできなく音域も低く、低く狭い音域の中でうたっている。

僕にとっての音楽の授業は、小学生の時は、とてもとてもきらいで、歌うのも先  
生にいくらいわれても中々声を出さないようくらいまできらいでした。中1のは  
じめも声を出したくないと、かなり思っていました。

僕が今ようになったのがいつからかは全く身に覚えがありません。何が理由な  
のかもわかりません。でも、歌っていくうちに「これが僕の声だ」と胸を張れるよ  
うになった感じはします。たとえば小学生の頃の文化祭での発表のときは一人で歌  
ったら、体育館の半分にも声が届きませんでした。でも、今はそれ以上には伝わ  
たんじゃないかなと思います。

僕にとっての音楽の授業とは、自分でもよくわからないけれど、いつもとは少  
し違う自分がいるところといえます。

昔はとても嫌いな音楽でしたが、今はどうかというと、好きかきらいかでいっ  
ちやうと嫌いです。でも昔よりかは普通の中に入りかけているような感じになりま  
す。「狩人の合唱」のときは、HくんやSくん、Tくんが異常なまでに楽しそうで、  
その楽しさがあってこそその音楽です。だから“ヨッホラララ・・・”のところも楽し  
くなります。3人のおかげで僕も一緒に楽しくなれます。

音楽に対してのイメージは嫌いとか楽しくないとかでしたが、今は昔のイメージ  
の中に少しだけ楽しいとか前向きなものが多くなっています。

Iくん、今も音楽は嫌いと言っているが、今年の文化祭ではシューベルトの「旅」の2番の  
歌詞のところを“自分の声”でとても素敵に歌えた。

(略)

音楽の教室では、自分の存在に自信を持ち、学ぶことが楽しくて、表現することが嬉しくて、  
そんな居場所にしたいものだ。

音楽の教師に「音楽は嫌い」とは、普通はなかなか言えないことだと思うが、素直に自分の気持ちを書いてもいいのだという教師へのゆるぎない信頼感があるのは明らかだ。自分の声も含めて、ありのままの自分を表現してもいいという教師の姿勢があるからこそ、子どもも少しずつ「自分の声」に自信を持つことができたのだろう。

ここで、小学校の音楽の授業のほとんどが CD 伴奏によって成り立っていること、音楽記号の学習の仕方について痛烈な疑問を投げかけている。

みんなとの雑談の中で、「小学校のとき、ずっと CD のカラオケで吹いたり歌ったりしていたけど、あれ、どうだった？」と聞くと、みんな一様に「歌いにくくて嫌だった。ピアノの方がずっといい！」「ピアノの方が一体感があっていい！」という。

ピアノが苦手だとか、多忙で練習する暇がないといった事情を配慮したとしても、それが音楽の授業だというのなら、教師は教材を考える必要もないし伴奏で苦勞することもない。しかし、授業は本来、創造的であるべきだと思う。子ども一人ひとり違う個性を持った人間であることを考えるとき、CD から出てくる心ない音楽に任せるわけにはいかないはずだ。

授業の準備で音楽室に行くと、小学校高学年の授業のあとだった。5線の黒板に、音符の名前やら記号などがたくさん書かれている。これらは音楽の歴史のなかで少しずつ少しずつ、音楽を楽しむために、また伝えるために積み上げられてきた大切な遺産だ。ところが、楽しむためのものであったはずなのに、音楽からかけ離れたただの知識として目の前に現れると、いくらうたうことが大好きな2年生のS君でも、その気持ちはどんどん音楽から離れていく。オトナの考えたことを画一的にそれもオトナの都合で一方的に子どもたちに降りかかると、それを本能的に振り払おうとするのは当然だ。

他にも、恥ずかしがり屋のHくん、表現することが苦手と思い込んでいたKくん、もう1人の3年生のMくんの音楽への想いからも、音楽が少しずつ楽しくなってきたこと、音楽の授業で相手の気持ちを考えたり自分と向き合ったりしていること、仲間と共に歌う楽しさが語られている。

いろいろな歌をうたう中で、教材の持っている背景や内なる思想を子どもたちに伝え、共感しながらうたい合うことを大切にしたいと思っている。「狩人の合唱」一曲とっても、音楽の躍動感はもとより、歌詞からもさまざまな世界に広がって授業は展開していく。男5人の歌を揃えるのではなく、一人ひとりの想いに気づき、それぞれの表現を大切に、そこに共感できる授業をつくりたい。

レポート発表で提出された実践曲

- 1 山口実践 ～ 「ブルッキーのひつじ」(M.B.ゴフスタイン 作 谷川俊太郎 訳 林光 曲)  
「なかよしの歌」 (木村次郎 詩 丸山亜希 曲)
- 2 石窪実践 ～ 「ます」 (林光 訳詩 シューベルト 曲)  
「種」 (木島始 詩 工藤吉郎 曲)

「年輪」	(木島始 詩 工藤吉郎 曲)
「きょうがきた」	(谷川俊太郎 詩 林光 曲)
「狩人の合唱」	(林光 訳詞 R.ウェーバー 詩・曲)
「船乗りたちの歌」	(林光 訳詞 R.ワーグナー 詩・曲)

### 三 今年度の特徴と来年度の課題

今年もピアノと音源の両方を活用しての分科会運営ができた。

音楽分科会なので、討論の土台として子どもたちの歌声を聞くことは欠かせない。また、実践された曲を参加者と一緒に歌って、その教材を実際に体験することも大切なことだ。

石窪レポートにもあるように、子どもたち一人ひとりに合った教材を選ぶためには、教師自身が音楽に身をゆだね、テンポやリズム、言葉から様々なものを感じ取り、自分のものとして表現する喜びを感じることで、自分の感性を磨き続けることが欠かせない。

今年も分科会でそのような時間を持つことができ、実行委員会の皆様に厚くお礼申し上げたい。

参加者は少なかったが、「教師の専門性」とは何か、「そろえない」とはどういうことかをそれぞれの実践をふり返りながら深めることができた。知識や技術は一方的に与えるのではなく、子どもたちの実態を適切につかみ、それらが必要になったときに(子どもの要求に基づいて)渡していくということ、また、それぞれ個性を持つ子どもたちがそれぞれの感じ方をそれぞれ自由に表現できることを大切にしていけることが討論された。

来年度は参加者を増やすために、もっと積極的な働きかけをすすめていきたい。